



こんにちは

人ってやつはうまいこと命令され指示がなければ、
動けない。

朝起きた瞬間、己で己を動かそうと自問自答しても、
これっぽっちも動けない。

己が知っている、
己自身、司令塔として不適格だってことだ。

誰かが与えてくれる当たり前の一生を、
拒んだ瞬間に、拒み続ける態度を身につけた、
あらゆることを裏切った最後には、
己の指令を裏切ることでお終いとなる。

起きれなくなった体に、
鞭打つ個体はどこにもおらず。

いとつまらない

お前に構っている暇はないのだと、
自分自身に言っている時点で面倒である。
ルールを作り出せるほど考えが深いわけでもないというにまったく。

では何をしたいくて今こうしてここにいるのか？
ようはルールを覚えなかったことの罰が回りまわっていまここにきている。
それだけの分かりやすい話だった。
ルールが分からないままで来た毎日を仰いだ時、
僕に考えられたのは楽しいことではなく、
ルールが欲しいルールが欲しいという妄言繰り返しだった。

無いのだ。特に。
まず自分を決まった形で呼んでくれる他者を求めたも、

能力自体が無かったのだからやれないことの方が多かったさ。
駄目だな。

トメカ

トメカはコードを打った
それは今田典也、「いまだてんや」というコードだった、
結果、僕とか、己とか、自分とか言っている誰そあれは、
今田典也という名前を得た。
良かったのか？

トメカは続けてコードを打った
今田典也は、空を見た、と
見上げた空に、は
何がある？

トメカはコードを打った
空には何もない、空っぽだと
今田典也は不思議にも、
悩みというものを失っていた。

駄目な空

もし誰とも合わないであれば、
何か障害として人を見ないのであれば
それは空の状態である。

空っぽでやることも考えることも無く、
一日を過ごすことが出来る。
役目が無いならすることも無い。
どこにもなににもないのだから、
そうおもえばどこを歩いても楽なはず。

トメカは続けてコードを打った、
見下ろす大地は、

今田典也は振り上げた頭を下げた、
そこにあったのは機能しなくなった日常、
働かなくなり、散在することでのみ、
己をあらわす廃棄物。

今田典也は息苦しくなった。

意味

空を想って日常を見下ろした時、
僕は苦しくなった。

そこには己がこなさなければならないものがあって、
人間が生きることにより排出する老廃物、
人は自らの肌を財布から作り出しては、
部屋に代謝してを繰り返す。
そういう動物だと決定づけられていたから。

トメカは続けてコードを打った、
見上げる空は？

何もない

あげたりさげたり

人生は上がったりに下がったりすることで成り立ってた。

それは楽しくなんなかった。

どこかにいける態度なわけじゃない、

ただ気分気性の波に合わせて、漂っているだけだ。

勇気が出たらよかったのにな。

トメカはコードを打った、

人。

人

人が入ってきた、
トメカ？
「空にしてみたらいい」
「かかるお金はここにあるから」
トメカは//を前につけて言ってくれたのだろう。
今田典也は始めた。

家の中を片づけるのは楽ではないし、
楽しいことでも無い。
ちょっとずつ仕上がっていくことでもない、
でも治っていく部屋の中身は空に近づいた。
空だ。

今田典也は以外に散らかってない部屋を想って、
とてつもない孤独を味わった。
脱ぎ捨ててきた皮や、降り積もった埃が終わりを迎えた時、
そこには思い出すら残ってなかった。

なんもない

得れたものが無かったにも関わらず、
増やしていったものの数々、
トメカは捨てるための金を与えてくれたのであって、
残すためになにかを与えてくれた訳でも無かった。

「それも捨てるんですか？」

第三者と関わることも出来なかったパソコンだ、
おもいで、あったかと問われれば、
誰かが思い出を持って生きていたことを知った、
それぐらいのものだった、
自分に何か世界と関わることを与えてくれる。
そんな訳じゃなかった。

「そうさ、これはパソコンなんかじゃなかったから」
ガラクタであった、中に込められたのは、

「エロ」

「捨てさせてください」

一式捨てることを見積もった

捨てる量を見積もり金額を計算してる業者、
リサイクルに回せるもの、まだ使えるもの。
自分が着た服なんか、着たい人間などいないはずだ。

「不服ですか？」

「廃棄しちまえばいいのに」

「でも余計、お金が掛かりますしね、ただで引き取ってくれるものがあるなら」

「リサイクルに出したほうが良いですよ」

例のパソコンもまた。

「データは消しておきましたから」

「」

「猟奇的なもの」

「いわんでくれ」

「さて全部合わせて5万円でしたね」

トメカはコードを打ちました

古い肌は無くなりました。

空に近づく

トメカはコードを打ちました

憧れたものになる

「ねえよ」

今田典也は引き払う一室を眺めて、

そう呟いた。

「ない、終わっちまったじゃんか」

「あの中に憧れたものがあったのですか？」

眺める先のトラックは走り出す、

見積み終わった廃棄物は全て、

トラックの中、運ばれていく。

「たぶん、なかったさ」

では

「今日、見上げたものを憧れにしましょうか」

「見上げたもの」

上を見るトメカは空を

空を切取って

「あ」

空はビシビシと外れ始めた、
空にひずみを浮かべて現れたものは、

「蒸発船です」

「なんだよ、これ」

いままで無かった影が顔に落ちてきた、
日差しを閉ざして冷えた肌触りを与える影、
日の指す余暇を与えず、大きな輪郭を切取る空の青も、
暗く見えた。

「時々、人間はふっといなくなります」

「それを蒸発と呼びます」

「そして蒸発するときに生まれる力は」

「蒸発機関として働くんですよ」

トメカはコードを打ちました、手持ちのコンピュータに、

「あなたが蒸発した時に生まれるエネルギーは」

「蒸発船を人の一生分、動かすことが出来るのです」